
タイムスリップ before 1000 years

ODA 義経

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

タイムスリップ before 1000 years

【Nコード】

N3485Z

【作者名】

ODA 義経

【あらすじ】

突如タイムスリップしてしまった！それも、平安時代に……！千年後に生きる現代人の彼女が、どのようにしてこの時代に馴染むのか？という、歴史ファンタジー、のつもりです。（設定は平安、ですが、世界観が時々壊れたり、これはこの時代とは矛盾する……などの歴史ファンの方々がいらっしゃれば、ご意見をください）

第1話 暗闇（前書き）

少な目、ですがどうぞ。

第1話 暗闇

私が目が覚めたのは、とある場所。
妙に肌寒い。

と、いうか、ここはどこだろう。
ていうか、私、何してたっけ…。

確か、記憶の糸、というか、過去を探る。

私はただの中学生だったはずだ。

可愛くもなければ、特に注目される人でもない、カリスマ性もなければ、特別運動能力が優れているわけでもない。

特に勉強が無理だ。

国語、1。数学、1。社会、1。理科、1。英語、1。

そんな人間は、漫画にしかいねえよ！

って叫び声が聞こえなくもない。

どこかの射的が得意な眼鏡少年と同じ……じゃない。

彼には、射的と勇敢な心がある。

でも、私にあることと言えば……。

あっ！あつたあつた。

舌！

舌の感覚は鋭い。

目隠ししてでも、コーヒー牛乳の、牛乳とコーヒーの比率や、酢豚に入っている調味料の比率を言える。

どうでもいいことだが、私にとっては非常に重要なことなのですよ。

と、話を元に戻そう。

ここはどこだ？

呼吸ができるということは、少なくとも酸素がある場所ということだ。

それが、地球なのか、はたまたどこかの惑星なのかはさておきだ。続いて、肌寒い。

ものすごく寒いわけじゃない。

わかりやすいところでいうと、11月初旬の天気くらい？いや、わかりにくいか…。

どう言えばいいのだろう。

冬着をするには早いけど、半袖では寒いだろうっていう？程度の寒さだ。わかんにくいなら、想像におまかせします。

少し寒さも堪えてきたので、二本ずつある手足の感覚を確かめて、腕を擦った。

どういうわけか、半袖だ。

本当にここは寒い。

どうしてこんなことになったのか…。

で、結局、目の視界は今だ真っ暗。

もしかして、目が無いなんて事態も考えたけど、瞬きができるのだから、たぶんただ暗い部屋か場所か何かにいるだけだ。

というか、なんで私はこんなところに？

私は意を決して動き出すことにした。

しかし、私がいくら手足を動かしても、そこに壁は見当たらなかった。

壁はなく、どこまでも続いているような気がした。

いつこうに、光は見えないし、世界の果ても見えない。

私は徐々にパニックに陥った。

いったいなんなのよ？

私、なにかした？

なにしたってのよ？

それにしても、この仕打ちはひどいんじゃないの？

怖い……

怖い怖い……

怖い怖い怖い……

不安のせいで、妙な脂汗が流れる。

不安はどんどん募る。

もしかしたら、これがいわゆる「世界の裏側」とかだったりするの
か。

とも何度も考えた。

光など、一ミリにも感じられない。

ひたすら、闇。

闇。

闇。

闇。

闇。

闇。

「誰かつ……助けてえ……っ……」

声を、いや、聞こえているのかわからない。
今にも泣き出しそうな、不安の声で叫んだ。
と、そのとき……。

「誰ダア？こんなところにさ居るのワア？」

一人の男性が、突如、明かりをつけて現れた。

第2話 縁。(前書き)

遅れました。

第2話 縁。

「ほら。食べな」

「あ、ありがとうございます……」

今は、私が一人でうろろろとしていたらしい場所のすぐ近くで、さっきの男性とキャンプを張っている。

「お前、この辺りじゃ見かけない人だな…なんだ？旅の人か…？」

「……」

私は質問に答えない、いや、答えられない。

なにせ、旅の人間ではないからだ。

というか、車で全国を回れる時代に、そんな旅をしようと思う人など、めったにいないだろう。

私は、さっき渡された、お粥のようなスープを飲んだ。

さっきまで冷えていた体は、徐々に温かみを取り戻した。

「そーいやお前、名前は？」

「私は……、ふじわら ゆかり 藤原 縁です」

「ほう。藤原の氏まで持つとは、お前、結構高い位の人間か…？」

私は、その質問には答えようがなかった。

位ってなに？

そう思った。

「俺の名前は、仁六^{じんろく}だ。よろしくな」

そういうと、そのまま布団に潜っていく。

いや、それが布団とわかったのは、彼がそこに入ると、眠ってしまったからだった。

それは毛皮で出来た、コートのようなもので出来ていて、とても暖かそうだった。

私も眠ろうと思い、毛皮に潜る。

すると、私が着ていた服のポケットに、なにやら一つ、入っているのが見つけた。

それは、ケータイ。

私はそれを開いてみた。

待受画面が写し出された後、電波の数を確かめる。

「圏外」と示された電波は、ここからでは何もできないことを物語っていた。

明日、もっと電波状況がいいところで、携帯を使おう。

そう心に決めて、眠りについた。

「おい！縁！縁、起きな！」

仁六が私を起こしたのは、夜明けになる、少し前だった。

前についていたキャンプの火も、今では消えて、煙を出すばかりだ。

「今から村へ向かうぞ。もしかしたら、お前のことを知っている人間がいるかもしれねえしな」

私も頷き、起き上がった。

その瞬間、体に寒気が広がる。

全身に鳥肌が立ち、歯ががちと震え出す。

「寒いなら、これを着ておきな」

渡されたのは、さっき布団として使っていた、毛皮だった。

こうしてコートとしても使うとは。

しかし、寒い今はどうでもいい。

できる限り暖かい格好をして、私は、仁六の後へついていった。

仁六は松明を手に、森や草木の映える下り坂を、次々と降りていく。私もなんとか必死にその後を追っていった。

「ちゃんとして来てるか？縁？」

「はあっ……はあっ……大丈夫です」

私は結構疲れたが、なんとか下り坂の恐怖はなくなり、なだらかな坂道を歩くこととなった。

どうやら、小さな峠を越えるつもりらしく、ゆっくりと山道のような場所へやって来た。

そのころには既に夜が明けたため、あの下り坂のように、暗くて視界が狭く、岩がごつごつしていて危険だ、ということもない。

ゆっくりと確実に上っていけば、大した危険など存在しなかった。ゆっくりと上っていき、頂上にたどりつくと、その遥か下、つまりは山の根本あたりに村のような小さな集落があるのがわかった。

「あそこが俺の村だ。しっかりついてこいよ」

その下山も、意外と危険だった。

山は、上りきったときより下るときの方が、事故が多いらしい。上りきった達成感のせいで気が緩むのが原因の一つ。

あとは、上りより、下りの方が、体重の関係上、滑りやすいのも原因だ。

と、仁六は言った。

「ただいま」

「よう！仁六！帰ってきたか！今日は収穫はあったか？」

「いいや。残念ながら、今回は収穫無しだぜ」

「へえ。あんたでもそんなことがあるんだなあ！？」

「あつ！！そうだった。お前、藤原縁っていう名前のやつ知ってるか？」

「藤原縁？いいや、俺は知らねえぜ？藤原っていうことは、新しい国司かなにかか？」

「いや、迷子になってたんで、俺が助けた女の子の名前なんだが、自分の住んでいる場所がわからねえらしいからな。知ってる人間がいないかどうか確かめに来たわけよ」

「そこんとこの子供か……。でも、知ってるやつは誰もいないと思うぜ？ なんだったら、お前が引き取ってやったらどうだよ？」

「いや。この子の家族がもしかしたら心配してるかも知れねえからな。そういうわけにはいかねえだろう」

私は、この村をよく見ていた。

遠くから見ると、ただの集落にしか見えなかったが、近くで見ると、その家の形に驚いた。

屋根だけの家がいっぱいある。

それに、その家一つ一つが藁で出来ている。

まるでテントのようだ。

暖かいのかどうかはさぞかし不安だったが、今はそんなことはいつてられない。

「縁。家に来るか？ 大したおもてなしは出来ないけれど、お前を一人にさせることもできねえからな」

「い、いいんですか？ ありがとうございますっ！」

私は深々と礼をした。

第3話 居候。

「ここが俺の家だ」

そこは、村のなかでは少し入り来んだ、手前が林になっている、はたまた屋根だけのような家だった。

「あつ！父ちゃん！お帰り」

そこにいたのは、白い上下が半袖の服を着た、私よりも少し年齢が高めの男子。

彼は桶で洗濯をしていた。

少し寒くなってきたせいで、手が赤くなっている。

「おう。いつも悪いな。秀丸」

「いや。父ちゃんだって、今日も狩り行ってたんだろ？怪我はなかったのかよ？」

そういつて、労るようにして家のなかに父親の仁六を入れた。そのあと、私をちらっと見る。

「君は？どうしたの？」

彼は意外にも、私に警戒することもなく、喋りかけてくれた。

「私…自分の家がわからなくて……。だから、仁六さんに、ここに泊まらせてもらいたくて……」

「ふん。詳しい話を僕も聞きたいな。家においでよ。家の中なら暖かいからさ」

暖簾のようなものがつけられた玄関をくぐり、私は中に入った。その瞬間に、全身の鳥肌が静まった。

中央にある囲炉裏を囲み、御座がひかれていた。その下は地面になっているので、底自体はとても冷たそうだった。

「まあ、どこでもいいから座りなよ。で、いったいどういうこと？ 教えてくれよ」

私は、彼に、今日の出来事を話した。仁六に助けられたこと。

この家に居候になりたいということ。その全てを。

「わかったよ。君も大変だったんだね。家でゆつくりと暮らしな。毎日がギリギリだけどな」

「本当にありがとうございます」

そういつて、私は頭を下げた。

の家にお世話になるんだから、当然のことだった。私は、仁六に感謝をしているのだから。

「そういえば、もうすぐで弥亞^{みあ}が帰ってくるな」

「弥亞さんも、ここの家の方、なんですか？」

「ああ。俺の妹だよ。野菜を市に買いにいつてもらってたんだ」

もう夕方になり、日も落ちてきたその時に、秀丸が言った。
恐らくそうとう遠くにあった市まで買い物にいったらしい。

「ここはやっぱ田舎だからなあ。遠くまでいかないといけないんだよ。
だから、行くだけで一日がかっちまうんだ」

仁六もそう説明していた。

どうやら、そうとうな場所にあるらしい。

田舎に暮らすのはやはり大変だ。

「お父ちゃん！帰ったよぉー！」

家の玄関に入る、一人の少女の声が聞こえた。

声からして、私と同年代であろうと思われる。

そんな少女は、そういつて暖簾のような入り口を開けた。

そこにいたのは、黒色のしなやかな髪の毛に、吸い込まれそうなくらいに真つ黒な瞳。

美人、というよりかは、可憐な女のような感じだ。

私と同年代、つまりは十代前半のはずなのに、大人の雰囲気漂う。
そんな彼女は、私を見るなり、

「どうしたの？その娘は？」

仁六は説明してくれた、私の宛がないことを特に念入りに。
すると、彼女はくすくすと笑う。

「全く。みすばらしい格好に、パツとしない顔。なにをしても微妙な女、だから捨てられたのかもね」。アハハハハ」

「こらっ！やめんか弥亞！！」

仁六は弥亞をしかる。

しかし、弥亞は笑うのをやめるところか、私を見下して、高笑いした。

「ふふっ！まあ、家にいさせて置いてやるわ。ま、あんたが私に対して、なにかをしでかすなんてこともないだろうしね。私の美貌を汚したりなどしたら、ただじゃおかないけどね」

こんな田舎の出身の子供が美貌だのなんだの言っても仕方がない。そう言おうとも思ったが、とどめた。

これ以上言い合ったりして、この家を追い出されたりなどされては堪ったものじゃない。

私には帰る宛など、今のところはどこにもないんだから。

ただ、この女とはこれからいざこざがありそうだと、女の勘とでもいうべきものが働いた。

第4話 進展。(前書き)

話がどんどんと変わります。

第4話 進展。

次の日。

この辺りを支配する、国司とやらからのお触書があった。

治暦元年

本年より、税金を四割に増やす。（中略）

国司 藤原 政満

まず私は、治暦元年という、年号が気になった。

私の生まれは平成だ。

もしかして、新しい年号に変わった？とは考えにくかった。

そもそも国司という職業すら謎。

だれか教えてくれええ。

と、いくら私が社会の評定が1でも、私が生まれる前の年号くらいわかる。

平成の前は昭和。

昭和の前は大正。

大正の前は明治。

平成は現在で23年目。

昭和が約60年。

大正と明治をあわせても約60年。

つまり、そう考えたとしても、早くて150年前……なのかな……？
そう考えると全て納得だった。

なにせ、していることは全て古い。

電線やテレビや電話が一切ない。

服装がなんか、真っ白ないかにもデザインではなく、実用性しか考

えていなさそうな服。

さらには子供たちが勉強せずに、親の仕事の手伝いしかしていない。これは、信じたくないけど、タイムスリップっていうやつだ。信じることは出来ないけど、きつと信じるしかない。

「おおーい！縁！井戸に水を酌みに行ってくれるかー！？」

「はぁーい！」

私も、しっかりと手伝いをしている。

居候の身なのだから、それくらいは当然だ。

水は、桶のなかに入れる。

井戸がこの村には、たったひとつしかなく、それも少し遠くにある。そのために桶を遠くまで運び、水を入れて帰ってこなくてはいい。

水は割と重くて、腕に負担がたくさんかかる。

なかなか持っていけなくて、結局時間が掛かってしまった。

「おお！少し遅かったなあ」

「……これ、重いですね……」

私は肩を回して、痛みをとった。
まあ、とれはしなかったが……。

「他にすることはありますか？」

「ああ。ありがとくな。じゃあ、洗濯をしてきてくれ」

「わかりました」

次に私は、家に戻る。

家にある桶を持ち、川へと向かう。

川はわりと近くにあった。

浅い川ではあるが、それなりに流れは急になっている。

川の質はどうかというと、とてもきれいだった。

魚がたくさんいるようなその川は、私が生まれてはじめて見るほどの綺麗さだった。

たぶん「現代」の川と比べても一番きれいだと思う。

きつと、山の雪が解けて、ろ過された水が流れてきているからだ。と、いうことは、とてつもなく冷たい水だろう。

私はそう覚悟した。

私はゆっくりと、冷たい水を手に入れてみた。

手から腕から、早くも全身に寒気が伝わって来た。

鳥肌がものすごい勢いで立つ。

私は、腕を引つ込めた。

手は真つ赤に霜焼けを起こした。

しかし、冷たくても、任された仕事は、こなさなくてはいけない。

私は、いそいで、なおかつきれいに洗濯をし始めた。

昔の川はとてもきれい。

それは洗濯ができるだけじゃなく、飲むことができるくらいにだ。水を少し桶に酌み、洗濯物をすませて干した。

まだまだ家にはしなくてはいけないことがたくさんある。

私は、薪割りを手伝った。

はじめは秀丸がやっていてくれたが、私も少し割ってみる。

しかし、秀丸は簡単そうに割るが、私はなかなか上手くはいかなかった。

斧を上手く振り上げ、降ろすのだが薪のちょうど真ん中に降ろさなくてはぱっくりと割れない。

相当な練習を積まないとこれはできないらしい。

それに、斧自体もものすごく重たい。

さすがにこの作業を私がやることは出来なかった。

でも、薪を整理して片付けたりするくらいならできる。

今日は一日その仕事を続けた。

その夜。

夕食は昨日とほとんど変わらない、粥のようなものだった。

昼食という概念がなかったこの時代では、私はとてもお腹が減っていた。

だから、このお粥がとてもおいしかった。

こんなにうまい食べ物を食べたのはじめてだった。

いや、料理的には、現代の方がおいしいはずなのに、こんなに、お腹を空かせていたことがなかった。

現代の日本には、食べ物が溢れているからだ。

店に入れば、位に関係なしに食事をとれる。

ファストフード店なら子供でも買えて、とてもおいしい。

食べ物是有り余り、捨てられ、燃やされる。

現代は、ものが優れているのに、それが上手く活かせていない。

この時代では、それがよくわかった。

第4話 進展。(後書き)

主人公の藤原縁は、唯一家庭科が得意でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3485z/>

タイムスリップ before 1000 years

2011年12月30日22時51分発行